

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.127- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 著者リプライ

鈴木 智之

この本を作るにあたって、どこまでが社会学でどこからがそうでないのかという問いを、かなり意識的に棚上げしたところがある。だから、「あとがき」において自分が「社会学者」として生きていることには触れたものの、本文の中では「社会学の研究書」であるとは自称しなかった。「どこが社会学なのだ」という厄介な問いを向けられて、苦し紛れの応戦を強いられるのを、できれば回避したい思いがあったことも否定できない。ところが、少なくとも僕の周りにいる人たちには、これは思いのほかすんなりと「社会学の本」として受け取られたようだ。ある友人は、「思っていた以上に社会学なので、びっくりしました」という感想をよせてくれた。氏素性は隠し難いというのか、お里は知れるものというべきなのか（いや別に隠そうと思っていたわけではないのだけれど）、本書は否応もなく社会学の文脈で読まれていくものらしい。今回、塚田さんから頂戴した「文学社会学の成果」という過分の評言も、そうした位置づけの上に発せられたものと思う。

しかし、そうであるからこそ、社会学者としてはよく「文学」を読んでいるけれど、肝心の「社会学」的な側面でいささか心許ないではないか、「社会の現実」にきちんと迫りえていないではないか、という厳しい問い直しにつながってくるのだろう。もちろん、この期に及んで、その問いかけを回避できるとは思っていない。

塚田さんが的確に把握してくださったように、本書での試みは、ひとつの物語化の企ての破綻（現実を前にした挫折や屈折）がさらなる物語化を生み、しかし、その物語の中にはあらかじめ（現実との関係の中で生じた）「困難」が刻印されている、したがって、物語の中に生じる破綻や屈折の痕をたどることによって、その語りの契機となった現実についての認識を抽出することができる、という考え方に立っている。このような方法の適用が妥当なものかどうか、また、それが村上春樹の二つのテキストに即して首尾よく展開されているかどうかについては、読者の判断を待たなければならない。しかし、「少なくとも何事かを語っている」地点にまではたどり着けたらと判断して、拙い論考を書物にまとめてみることにした。だが、それに対して塚田さんは、その「何事か」の把握の水準が「偶発性」だの「他者性」だのという「抽象的な認識」にとどまっており、「人間存在をとりまきこれを規定している物質的・文化的な文脈」を記述するところまで至っていない、と評価する。八十年代・九十年代の「歴史的状況」を浮かび上がらせる試み（当然それは期待されてしまうのだ！）としてはあまりに未熟ではないか、ということである。

今の時点で、これに抗弁するだけの準備も力量もない。社会学者として、文学テキストをひとつの社会的テキストとして読み込もうとする以上、それを通じて把握される「現実」の位相

がこの段階にとどまっていたよいはずがない。文学テキストの文学性におもねって、本業をおろそかにしてはならない。その通りである。

しかし、どのようにしてその先へ（その奥へ？）進んでいけばよいのか。一足飛びに、というわけにはいかないと思う。少なくとも、テキストの外部に既成の社会学的言説をはりめぐらせて、その中に文学作品の読解を呼び込んでいくという手法は、本書の中でやってしまった範囲でもすでに「やりすぎ」だと感じており、これ以上そういう方向性はとりたくない。そもそも、社会学的な言説に回収しきれない「現実感覚」の浮上を予感すればこそ、「文学」などという迂回路を経由しているのである。それを徹底するとすれば、たくさんの迂回路（テキスト）を幾筋もたどることによって、またそれらの相互関係（関テキスト性）を丹念に解きほぐし、撚り合わせることによって、その先に「社会的なるもの」の手触りや輪郭を浮かび上がらせていくしかない。

ある対象を認識しようとする際に、その全体を俯瞰的にとらえて、形態や構造や組成を記述していくという（正攻法な）やり方もあるだろうし、むしろ思いきって目隠しをして、そこに手を伸ばして触ってみる、という方法もあるだろう。「文学テキスト」を介して「社会」的現実の感覚を浮かび上がらせるというやり方は、後者の「触知」の方法に近い。その試みのたびに なされていることは「盲人象をなでる」がごとき危うい作業なのだろう。僕が触れているのは「鼻」なのか「牙」なのかもわからない。しかし、そこで手のひらに伝わってくる「ザラザラしている」とか「つるつるしている」とかいった触感だけは確かである。そうした触知の積み重ねの中で、巨象の姿を描きとることができたら、どれだけ素敵だろうか。僕が夢見ているのはそのような社会学である。いまだ遠く及ばないが、意気込みとしては、これからもそんな姿勢で続けていきたいと思っている。

(すずき ともゆき 法政大学社会学部)